

## 国際バカロレア「日本語 A : 文学」を Moodle 上で成立させるための教材デザインを考える

### International Baccalaureate “Japanese A : Literature” Proposal of the teaching material design to make it work in Moodle.

五十嵐 敢<sup>\*1</sup>, 中野 裕司<sup>\*2</sup>, 喜多 敏博<sup>\*2</sup>, マジュンダール リトジット<sup>\*2</sup>  
Tsuyoshi IGARASHI<sup>\*1</sup>, Hiroshi NAKANO<sup>\*2</sup>, Toshihiro KITA<sup>\*1</sup>, Rwitajit MAJUMDAR<sup>\*2</sup>

<sup>\*1</sup> 熊本大学大学院社会文化科学教育部教授システム学専攻  
<sup>\*1</sup> Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University  
<sup>\*2</sup> 熊本大学

<sup>\*2</sup> Kumamoto University  
Email: tigarashi@st.gsis.kumamoto-u.ac.jp

あらまし：国際バカロレアの高校生プログラムでは母国語を含む言語科目を二科目選択しないといけ  
ない。しかし、指導者の少なさやオンラインで教育が完結できないという考えから、海外では日本人であり  
ながら「日本語」を選択しない高校生も多い。それでも、考え抜かれた教材と上手に作られたカリキュ  
ラムがあれば、Moodle 上で学習が可能ではないか、そうすれば母国語を捨てずに将来の高等教育につな  
がるのではないかと考え、試験形式から要件を整理し実際の作成面での課題を展望する。

キーワード：国際バカロレア, IB 日本語, Moodle, デザイン研究, 学習意欲

#### 1. 何が開発のネックになっているのか

コロナ禍を奇貨として、国際バカロレア<sup>(1)</sup>の  
IBDP<sup>(2)</sup>の授業は教室での授業に加え、オンラインの  
同期/非同期型授業や Google Classroom を併用したガ  
イドライン<sup>(3)</sup>が提供されている。では、そこまで一  
度自由になった授業の方法が、同期型の授業を含ま  
ない Moodle 等の LMS だけで完結できない理由は何  
か。

それは、「日本語 A : 文学」では最終的な試験が手  
書きの小論文と音声によるプレゼンテーションによ  
り評価されることと、文学テキストをかみ砕き自分  
なりの主張を構成していく力を育てることが、非同  
期型のオンライン教育では難しいとされているから  
だ。つまり、学習者なりの読み、学習者なりの問題  
意識、そして学習者なりの論理構成力を育てるた  
めには、人間の頭と手を使って教室で教えるべし  
というマインドセットがいまだ根強いことに理由  
がある。

一方で、IBDP では母国語を受講しなければい  
けないが、日本以外では「日本語 A : 文学」を学  
ぶ生徒や指導者の数は限られる。そのため、生徒  
数が少ない学校では「セルフポート」と呼ばれる  
授業形式で個別指導の先生がつくのが一般的だ。  
しかし、それでは指導者の数という限界と、指導  
力のばらつきと、時差を超えられず、世界で学  
ぶ日本人の日本語を育てる機会が奪われてしま  
うという問題がある。学習塾など校外の学習環  
境の充実も必要で、成績を上げにくい科目は現  
実に選ばれにくい。

では、これらの条件を超えながら国際バカロ  
レア「日本語 A : 文学」を Moodle 上で成立さ  
せるための教材デザインはどのようなものかを考  
えてみたい。

#### 2. どのような考えで作っていくか

問題点がマインドセットと、指導者数と技術のば  
らつきから来るのであれば、「日本語 A : 文学」と  
いう科目を一つと捉えずに、いくつかのブロックに  
分けその要素を洗い出して課題を明確化すればよ  
い。その上で、学習意欲を維持させながらオンラ  
インで学ぶ仕組みを構築するために教室の授業を  
置き換えていくというステップが必要となるだ  
ろう。

例えば、この科目の試験形式は「ペーパー 1」,  
「ペーパー 2」, 「個人口述」という 3 種類に分  
けられる。それらの試験形式と問題傾向を洗い  
出せば類似の問題は指導者の側が作ることが  
できる。そして、そのテストを評価するルーブリ  
ック (IBDP では「規準」と呼ばれる) を AI に  
読み込ませ、テストの小論文のデータを学習さ  
せていくことで、精度の高い採点結果が得られ  
ることが想定される。具体的に、各試験の傾向  
とどのような点に留意してデザインすればよ  
いかを次節で記述する。

##### 2.1 ペーパー 1-初見の文章を分析する小論文

ペーパー 1 は、40 行程度の初見の文学テキ  
ストを読み、その内容と技法、筆者の意図を分  
析した小論文を 75 分で書く試験形式だ。ハイ  
ヤーレベルと呼ばれる受講形式では 135 分  
で 2 題に回答する形になるが、これは問題量  
の差だけであり、難易度には差がない。画面  
での表示形式は、印刷や手書きでメモがし  
やすい PDF での提供とする。基本的な修  
辞法、例えば直喩・暗喩・擬人法などの技法  
や原稿用紙の使い方などは、小テストの形  
式を採用する。あるいは、分析方法は実際  
の対面型授業の録画を VOD で提供す  
ることも有効だと思われる。小論文はテキ  
ストデータで提出させ、その添削方法につ  
いては、規定のル

ーブリックを使い AI に採点させる。

## 2.2 ペーパー2-学習した2作品を比較する小論文

ペーパー2は、学校の授業で学んだ2冊の文学テキストを整理し、設問に対して共通点と差異点を比較しながら105分で小論文を書く試験形式だ。ここでは、学校や学年により採択テキストが変わるため、文章を読む作業は Moodle 上では行わない。しかし、頻出の作品、例えば漱石の『こころ』やイブセンの『人形の家』などをタスクに分割して教材化することは可能だ。

具体的には①知識としての作品背景②人物像の相関③文体と構成の特徴④主題とそこに至るための作家の意図という低次から高次の問題構成が考えられる。低次の問題は知識レベルとして小テストで攻略できる。高次のレベルは、ペーパー2の過去問題から問をかみ砕いてトップダウンさせる形と、心情・山場・葛藤という中位の問題を学習者同士でフォーラム上でディスカッションさせて複数の視点から考えさせる方法が取れる。作品の共通点、差異点の捉え方については、発想法と収束のためのテクニックがあり、この部分は文章を読ませるよりも、VOD の提供による講義を聞く形式の方が現状では効率が良い。

ペーパー2の最終試験については、採点規準が2026年試験から改まる予定だが、日本語版の採点規準が2025年5月段階では発表されていないため、指導者が直接採点することが現状では必要だと考える。ただし、前述のペーパー1でもし AI による添削が可能になれば、次は要件が複合的になるだけで異なる技術が必要になるわけではないので、近い将来には不可能とは思わない。

## 2.3 個人口述-10分間のプレゼンテーション

個人口述は、2冊の文学作品からそれぞれ40行以内の抜粋を作り、その抜粋部分をグローバルな問題と関連させ10分間のプレゼンテーションを行う試験形式だ。学問的誠実性の観点から、リハーサルが許されず、本番が一回しか録音できないため、学習者にとっては最も心理的な負担のある課題でもある。ここではリハーサルが禁じられていることを逆にとり、音声認識/テキストトウスピーチを使った技術が学習者を助ける可能性がある。つまり、プレゼンテーションを行うスクリプト(台本)を学習者が作ってそれを AI に発声させ、メリハリや構成を確認する方法と、逆に学習者が発声したものをテキストに起こして、それを磨き上げることで自己練習ができるのではないか。

作品の要点の洗い出しや主題に至るための作者の意図はペーパー2のブロックでの分割指導方法が援用できる。そこに、グローバルな問題を入れるところが個人口述のポイントなので、この部分は学習者同士でディスカッションさせることで、問題を言語化し、他者から見た視点を入れることで相対化ができる。具体的には戦争・貧困・格差・ジェンダーなどのトピックに問題を分け、その問題に興味のある学習

者が集まることで、相互にフォーラムで書かせることが有効になるだろう。

## 3. 人ができることとの棲み分けと課題

私の考えは、人間の指導者を疎外するものではない。むしろ、Moodle 上でできることは Moodle 上で行い、オンライン学習だからこそその困難を指導者は理解し手を差し伸べる必要があると考えている。例えば①相談相手がおらず手詰まりになってしまう②誰も伴走する人がおらず継続する勇気がもてない③自分が目標としたいロールモデルがなく先が見えないという3点に段階的な解決法のヒントを見せること、あるいは相談に乗ることこそが指導者の役割ではないかと考える。ここはコンテンツのデザインと学習者支援の両方に ARCS-V<sup>(4)</sup>モデルの考え方が援用できるのではないか。

また、実際にオンライン上で教材を構築していく中で、学習者は作成者の意図しないところでストレスを受ける可能性が高い。それは、本を紙で読み人間と音声で対話するという方法から、画面上のどこかある文字データやタグを探して読み有用か否かを自分で判断するというメディアの違いがあるからだ。画面の中のヒントは、心理的な盲点になっていて書かれているのに気づかないという経験をした人も多いだろう。そのため、学ぶためのコンテンツの質を高めていくことと並行して、インターフェイス/ユーザエクスペリエンスも考慮したデザインにすることも必要だと考える。

さらに、将来的には国際バカロレア協会も手書きの試験を完全にやめる可能性もあるが、現在の課題として本試験に沿った手書き小論文の提出時にどう対応すればよいかという点がある。活字と違いOCRソフトなどの仕組みが使えないため、全てデータで提出させオンライン上で処理するのか、それとも本試験のみ PDF などで提出を受けつけ指導者が採点することで温かみを出すのか、このあたりはもう一つの課題になるだろう。

### 参考文献

- (1) 文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム：“IB(国際バカロレア)とは”  
<https://ibconsortium.mext.go.jp/about-ib/> (参照 2025.06.01)
- (2) 文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム：DP (ディプロマ・プログラム) とは  
<https://ibconsortium.mext.go.jp/about-ib/dp/> (参照 2025.06.01)
- (3) International Baccalaureate Organization: “Online learning, teaching and education continuity planning for schools”  
<https://www.ibo.org/globalassets/new-structure/covid-19/pdfs/online-learning-continuity-planning-en.pdf> (参照 2025.06.01)
- (4) J.M.ケラー著、鈴木克明監訳”学習意欲をデザインする ARCS モデルによるインストラクショナルデザイン” 北大路書房、京都 (2010)